国立ハンセン病資料館

資料館だより

2024.10.1　No.124（季刊）　編集・発行　国立ハンセン病資料館

ミュージアムトーク2024年
特集「ハンセン病療養所の女性たち―1冊の本をめぐって」のご案内

ミュージアムトーク2024で取り上げた本は
当館の図書室で貸出しを行っております。

当館のミュージアムトークは、当館学芸員または外部の専門家を講師とし、それぞれの切り口で、ハンセン病療養所における、文学、運動、スポーツ、食、補装具などの多岐にわたるテーマを取り上げ、参加者のハンセン病問題への理解を多角的に深めていただく機会としてきました。

2024年のプログラム（全５回）では、「ハンセン病療養所における女性たち」を特集し、ハンセン病療養所におけるジェンダー、ならびにハンセン病患者・回復者の女性が置かれた複合的な差別のありようを、女性たち自身が書いた本を通じて探ります。このテーマは、当館が初めて取り上げるものであり、さらに、これまでの参加者の要望にお応えしたものでもあります。

第１回は講師の体調不良により中止となりましたが、第２回は津田（つだ）せつ子著『曼珠沙華（まんじゅしゃげ）』（私家版、1981年）を取り上げ、著者の婦人会での活動や少女舎の寮母としての経験などを紹介しました。

現在参加者受付中の講座は以下のとおりです。

11月23日（土）開催の第３回「闘った女性の本と証言―上野正子（うえのまさこ）『人間回復の瞬間（とき）』」（講師：田代学（たしろまなぶ）、当館学芸員）では、1998年の「『らい予防法』違憲国家賠償請求訴訟」で最初の原告となった上野正子さんの経験を、当館所蔵の証言映像も手がかりに考えます。本講座では、上野さんが書いた家族との交流や療養所のなかで出会った女性についてもお話しします。

12月14日（土）開催の第４回「内側から広がる言葉―塔和子（とうかずこ）『記憶の川で』」（講師：長谷川秋菜（はせがわあきな）、当館図書室司書）では、詩人の塔和子さんの作品の評価を問い直し、ともすれば「内向き」と評価されがちな彼女の詩が、人々の共感を生み、広がっていくさまについて、生殖やルッキズムの観点などを交えて考察します。

最後に2025年の１月18日（土）に開催する「再起する女性像―藤本（ふじもと）とし『地面の底がぬけたんです』」（講師：吉國元（よしくにもと）、当館学芸員）では、全盲で手足に重い障がいがありながら、旺盛な執筆活動を行った女性として知られている藤本としさんがどのように絶望から再起し、自らの身体で生き抜く術を獲得していったのかについてお話しします。

これらの講座で、運動、文学、障がいなどの局面における女性たちの葛藤について一緒に考えてみませんか？ 会場は当館の映像ホールで、各回14時から15時の開催となります。また、ご参加に関してはすべて事前予約制（定員130名）です。今年からはライブ配信をいたしませんが、当日の記録は後日当館のYouTubeチャンネルで公開します。ぜひご参加、ご視聴ください。

（吉國元）

詳細・お申込みは
こちらから

常設展示室内の撮影について

国立ハンセン病資料館では、今秋より私的利用（個人や家庭内での利用）に限り、常設展示室における写真撮影を一部の資料を除き可能といたしました。展示資料や解説を後から見返して理解を深めたり、当館の見学で学んだことをご家族と共有したりするためにご活用いただければ幸いです。

また、展示資料のうちSNSでの発信が可能と判断したものについては、「SNS OK」の表示をしております。これらの展示資料についてはぜひ撮影をしていただき、見学のご感想などとともにぜひSNSでの発信をお願いいたします。「SNS OK」の表示がない資料の写真を公表する場合には、著作権法に抵触する可能性がありますので、ご注意ください。また、展示室内での動画の撮影はご遠慮ください。みなさまのご理解とご協力をお願い申し上げます。

館蔵資料の
画像データ利用に
ついて（当館HP）

常設展示室で展示をしている写真の一部については、当館ホームページ掲載の画像提供サービスよりご提供が可能ですので、あわせてご活用ください。

（橋本彩香）

図書室より

亜熱帯の美しい動植物を独特の精細な筆致で描いた画家田中一村（たなかいっそん）。その奄美での芸術活動が国立ハンセン病療養所奄美和光園から始まったことをご存じでしょうか。図書室では12月１日（日）まで、田中一村に関する資料を集めたミニ展示をおこなっております。

奄美に移住した一村は、到着して３日目に和光園を訪れ、爾来入所者や、ハンセン病隔離政策に反対した小笠原登（おがさわらのぼる）医師らと交流を深めました。翌年秋には和光園官舎に居を移しています。官舎の庭で描いた「パパイヤとゴムの木」は、一村が奄美で制作した最初の本格的な作品です。また、代表作のひとつ「白花と赤翡翠（アカショウビン）」は、和光園のキダチチョウセンアサガオ群生を描いたものです。

隔てられた生活にあった入所者たちは、一村に家族の肖像画を依頼するようになります。一村は写真を元に、それが集合写真の豆粒ほどの顔でも、横顔の場合でも、立派な肖像を描き起こすことができたといいます。

ミニ展示では、一村が和光園で描いた作品を収録した画集をはじめ、一村と入所者との交流が綴られた伝記、一村と関わりのあった人物についての書籍など、一村と和光園の関係を深く知ることのできる資料を取り揃えています。なかでも、一村の絵が表紙を飾った機関誌「和光」は、美術館ではなかなか展示されることのない、当館ならではの貴重な資料です。

是非とも当館図書室に足をお運びください。

（長谷川秋菜）

国立ハンセン病資料館　利用案内

出張講座案内　団体見学案内

■開館時間　９：30～16：30
■入　　館　無料
■休 館 日　毎週月曜日（祝日の場合は開館）、年末年始、国民の祝日の翌日、館内整理日
■交　　通　・西武池袋線 清瀬駅南口より　西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分（「ハンセン病資料館」下車）
・西武新宿線 久米川駅北口より　西武バス「清瀬駅南口」行バスで約20分（「ハンセン病資料館」下車）
・ＪＲ武蔵野線　新秋津駅より　徒歩約20分

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13　TEL 042-396-2909　FAX 042-396-2981　URL https://www.nhdm.jp/

おすすめ図書紹介

『しがまっこ溶けた』（金正美、NHK出版、2002年）

栗生楽泉園に入所していた桜井哲夫さんこと「哲ちゃん」と、著者の金正美さんの交流を描いたエッセイです。桜井さんは流行に敏感で、若者向けの音楽を好み、50歳近く年の離れた金正美さんと楽しく対話をするなど、瑞々しい感性の持ち主でした。想像を絶する数々の苦難に見舞われながらも、自分の生きる場を「まほろば」にしようと力強く生きていた桜井さんは、ハンセン病に対して「俺はむしろね、感謝してるの」と言います。その生き様を間近で見て、金正美さんが何を思い、考えたのか。ぜひ一読して、感じてください。あとがきを読むと、表題の「しがまっこ」が何なのかも分かります。（図書室 斉藤聖）

『奇妙な国』（島比呂志、新教出版社、1980年）

著者の島比呂志さんは、星塚敬愛園に入所していた回復者です。表題作『奇妙な国』は「面積が四十ヘクタールで人口が千余人という、まったく玩具のような小国」で暮らす人々を描くお話です。滅亡することを一大理想として掲げているこの国ですが、時代の変化に伴ってその理想は徐々に失われていきます。目まぐるしく変化する奇妙な国の様子を傍観者として眺めている主人公の青木ですが、物語の最後で彼は驚きの選択をします。いったい何が青木にその決意をさせたのか。青木の目を通して描写される奇妙な国の様子を垣間見ながら、青木の末路について想いを馳せ、考えていただきたい作品です。（図書室 斉藤聖）

『麦ばあの島』全４巻（古林海月、すいれん舎、2017年）

時は1990年代後半、短大生の聡子と麦ばあは病院で出会います。麦ばあの思い出話から、麦ばあが当時療養所で出会った人々との群像劇が展開されていきます。それは聡子の人生にも大きく影響していくこととなります。病気の症状や差別、苦しみや悲しみに途方に暮れながら、それでも前を向いて生きていく彼女たちの人生を通して、ハンセン病問題を知ることができる一作です。この物語はフィクションではありますが、作者が療養所関係者に、丁寧に取材をして描きあげました。漫画で描かれているため、小学生の方にも読みやすく分かりやすい、お薦めの作品です。（図書室 武藤久美）

『世界の伝記NEXT　中村哲』（二尋鴇彦／和田奈津子、集英社、2023年）

物語の冒頭、アフガニスタンで現地の少年に「カカ・ムラ」と慕われている日本人がいます。中村哲さんという医師です。彼の前にはいつも障壁が立ちはだかります。その度果敢に立ち向かう彼に、現地の人は「どうして　そこまでわたしたちにつくしてくれるんですか」と聞きました。すると彼は「目の前にこまっている人がいたら　手を差しのべる　それはふつうのことじゃないかい」と答えたのです。彼の全ての原動力が、この言葉にあらわれています。彼の少年時代から亡くなる2019年までの希望の軌跡を、漫画で分かりやすく描いた伝記。お薦めの作品です。（図書室 武藤久美）

ギャラリー展「富山秀伯作陶展―隔離の壁を超える作品たち―」開催

当館では10月16日（水）～11月４日（月）に「富山秀伯作陶展－隔離の壁を超える作品たち―」を開催します。

富山秀伯（園名：富岡克行）さんは1948年群馬県生まれ。小学校５年生頃にハンセン病を発病し、1961年に多磨全生園に入園しました。東村山町立東村山第二中学校全生分教室を経て、邑久高等学校新良田教室の11期生として入学し、高校卒業後は多磨全生園に再入園します。自治会活動に取り組み、将棋・ソフトボール・カラオケ等の様々な趣味に力を入れてきました。

とりわけ陶芸は、富山さんにとっては大きな生きがいでした。1980年から多磨全生園陶芸室に籍を置き、作陶活動にのめり込んでいきます。陶芸を生業として社会復帰することを目指しますが、東京都内で開催された大きな公募展では入選できず、挫折の日々を送りました。

最後の出品と覚悟した富山さんは、手に後遺症があるという不利を抱えながらも「誰か一人でも見てくれる人がいる」との信念で成型に打ち込み、実家の梨園の木の灰を用いた釉薬で色付けした大壺を作ります。無心の気持ちで仕上げた「紫陽花」は、目標としていた公募展にみごと入選しました。

これに手ごたえを感じた富山さんは、本格的に陶芸家の道を目指しますが、資金面や自身の障がいの都合で社会復帰を断念。それでも陶芸を続け、東村山市中央公民館の市民陶芸クラブの陶芸講師を担当するようになります。講師として参加者の目の前で作品を作ると高い技術から一気に信頼を得、市民陶芸家との交流が始まります。1991年には教え子の励ましもあり、西友小手指店コミュニティ・ギャラリーで個展を開催しました。市民陶芸クラブの講師は17年間続きました。

療養所内での趣味として始まった陶芸は、社会でも通用するプロフェッショナルの域にまで達し、ついには市民との交流を生み出しました。富山さんは作陶活動を通じて「隔離のもとでの社会復帰」を実現したのです。

ギャラリー展では富山さんの所蔵する作品約40点を紹介します。茶碗、水指、鶴首、大皿、壺など多彩な作品が並ぶ予定です。

ハンセン病政策による偏見・差別に屈せず、理想の作品を追い求めて作陶活動を続けた富山さんの力強さを感じていただければと思います。ぜひご来館ください。

（田代学）

紫陽花　1985年頃

10月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7 休	8	9	10	11	12
13	14	15 休	16	17 休	18	19
20	21 休	22	23	24	25	26
27	28 休	29	30	31		

ギャラリー展 富山秀伯（10/16~11/4）

11月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5 休	6	7	8	9
10	11 休	12	13	14 休	15	16
17	18 休	19	20	21	22	23 ミ
24	25 休	26	27	28	29	30

ギャラリー展 人権の森（11/16~12/8）

12月

日	月	火	水	木	金	土
1	2 休	3	4	5	6	7
8	9 休	10	11	12	13	14 ミ
15	16 休	17	18	19 休	20	21
22	23 休	24	25	26	27	28 休
29 休	30 休	31 休				

休：休館日　　休：図書室休室日　　ミ：ミュージアムトーク（各回14：00～15：00）

：ギャラリー展「富山秀伯作陶展」開催　　：ギャラリー展「人権の森絵画展」開催